慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E・フロム著 マルクスの人間概念
Sub Title	Erich Fromm: Marx's concept of man
Author	由良, 君美
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.319(111)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0111
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

形で構成されることになると考えるからである。

さてこのような問題意識に立ってまず序説では市民革命としての英国革命の特質が、反独占運動と農業・土地問題の二点について極く簡単にふれられる。そして以下、第一章左翼民主主義の成立――ジョン・リルバーンとレヴェラー運動*――、第二章社会主義ユートピアの構想――ジェラード・ウィンスタンリとディガー運動――、第三章革命的無政府主義の先駆――第五王国思想の発展――、第四章不服従運動とその思想――初期クェーカーの社会思想――の順で社会変革行動に参加したグループの行動と思想が克明に分析されている。とくに革命の政治過程の推移と共に諸勢力の行動がどのように変化していったのか、またそのような行動を支えた思想はどのような特徴をもっていたのかという点についての分析はすぐれているといえよう。しかしこのような独特の社会思想史的分析には今後解決すべき問題がないわけではない。

その第一は市民革命としての英国革命をどのように把握するのかという問題である。それはとくに英国革命の経済過程の分析（経済史的分析）の前進にまつところが大きいが、同時に経済史の成果に基く政治革命としての英国革命の特殊性を明らかにすることを意味する。これは著者だけに求めることは無理なのであるが、この種の社会思想史的分析の前進にとって絶対に欠くことのできぬ必要条件であろう。例えば英国革命が宗教的な性格を帯びていたこと、或は政治革命として保守的な性格をまとっていたこと等の英国革命の個性的性格がそれによって明らかとなるであろう。そしてこの必要条件の可能な限りの充足の上で、諸勢力の行動及び思想の政治的・社会的な意味を確定すべきである。

ここに第二の課題がある。すなわち著者がレヴェラーズ、ディガーズ、第五王国、クェーカーの諸勢力の行動及び思想を統一的に夫々左翼民主主義、社会主義ユートピア、革命的（暴力的）無政府主義の先駆、非暴力的無政府主義等と把握するのである。しかしこのような規定を十分説得的なものとするには、第一の課題の充足と共に、経済、政治過程の変革をも包含した社会全体の変革のダイナミズムをどのようにつかみとるかという方法的な問題、さらには近代資本制社会成立後に発展した諸思想と英国革命当時の思想の比較についての方法的問題等の解明が不可欠である。例えば英国革命前期におけるレヴェラーズとディガーズの運動及びその思想と後期の第五王国運動とクェーカーの運動とその思想が何か平板的に並列されてしまって、両者が革命の夫々の過程でうまれざるをえなかった必然性、とくに前期の社会的・政治的な二つの潮流の運動が何故後期に到り、極めて宗教的な性格をもった二つの潮流に再編されたのかという点が、つかみえないことになるのである。つまり前期と後期では民衆の運動の展開形態、またそれを支える思想にかなり大きな相違のあることにもっと注目する必要があるのではないかということである。そしてこのような研究は、例えばドイツにおける宗教改革と農民戦争の時期と同様の問題の解明に大きな示唆を与えるであろう。特に農民戦争終了前と終了後の民衆運動の展開形態とこれを支える思想には大きな相違があり、終了後のそれは極めて宗教的性格を強くしていたことの解明には大きな示唆が与えられると思う。そしてここで生まれた再洗礼派の運動と英国でうまれたクェーカー教徒の間にも共通性のあることは興味深い事実である。

以上のような問題点を有するにせよ、英国革命当時の社会思想の統一的研究を一歩前進せしめたことは疑いない。（創文社・A5・二七五頁・八〇〇円）　―寺尾　誠―

＊　＊　＊

E・フロム著『マルクスの人間概念』

（原名 Erich Fromm: *Marx's Concept of Man*, Frederich Unger Publishing Co., 1961. $4.75.）

本書を読むに先立って念頭にすべきことは、「思想史名著叢書」（Milestones of Thought in the History of Ideas）という、やや啓蒙的性格のシリーズの一冊として書かれたものであること・それも、「経済学＝哲学ノート」を主体とするマルクスの諸著の抜萃の解説的序文として書かれていること・マルクス主義にたいする現代アメリカの甚だしい偏見を、初期マルクスのヒューマニスティックな性格に力点を置く解釈によって矯正し、いずれの冷戦哲学にも捕われない地点で、マルクス思想の遺産を「健全な社会」建設の青写真に摂取することを目指す本であること、である。その際、「経済学＝哲学ノート」の本格的翻訳を含むのは、この本を嚆矢とするという風土でなされた仕事であることも考慮されねばならない。（＊本書の「ノート」の訳者は、ロンドン大学の F. B. Bottomore である。これ以前に、評者の知るかぎりでも、モスクワ版英訳が Martin Milligan によってなされており、R. Dunayevskaya: *Marxism & Freedom*, Bookman Association, 1958. には要部の抄訳が収められている。しかし、モスクワ版は、アメリカでは入手できない事情があったらしい。また、Dunayevskaya の紹介は甚だしい反共主義に害われていた。従って、「ノート」の本格的紹介はフロムの言うとおり、アメリカではこの本が最初といえるのである。）「ノート」や「初期マルクス」の研究が活況を呈している我が国や仏独英の研究に対するのとおなじ態度で、この本に接する人は失望する筈である。

フロムのマルクス像は、マルクスを「予言者的メシア思想・キリスト教分離教会派思想・十三世紀トミスム・ルネサンス・ユートピア思想・十八世紀啓蒙思想の継承者」（p. 68）と考え、「世俗の言葉を用いて、予言者的メシア思想の伝統に新しいラディカルな一歩を進め」（p. 3）たものと見、彼の思想は「精神的実現の場としての社会という予言者的キリスト教理念」と「個人の自由という理念」との「総合」にほかならないとする所になり立つ。この「総合」のなかに、「総体としてのマルクス」（p. 72）があり、彼のヒューマニズム哲学の核心である「疎外」に基く「人間概念」の成立根拠もある。「若きマルクス」と「老マルクス」の連続点は「疎外概念」に求められねばならず（p. 51）、アメリカ的誤解からもソ連的動脈硬化からも自由な、真に疎外から回復した「人間主義的社会主義」を求めるには、若きマルクスの、私有財産機能の分析に発し疎外機能の把握に至る認識を生かすべきである。「他者からの疎外」のみでなく「人間性の本質からの疎外」をも強調している面こそ、水爆と巨大政治機構を前にした「全人類的疎外」という現状に強く生きる（p. 58）ものであるとする。（＊フロムのこの面の思索は、近著 *May Man Prevail? An Inquiry into The Facts and Fictions of Foreign Policy*, (Anchor Books), 1961, 95 c. に展開されている。ほかに、フロムの内在的研究として推したいものに、John H. Scharr: *Escape from Authority*, Basic Books, 1961, $6.50. がある。）　―由良　君美―

＊　＊　＊